

反基地闘争の歴史と基地問題の行方

—— 問うべきものを見失わないために

毛利 慶典

日本国憲法前文

日本国民は、正当に選挙された国会における代表者を通じて行動し、われらとわれらの子孫のために、諸国民との協和による成果と、わが国全土にわたつて自由のもたらす恵沢を確保し、政府の行為によつて再び戦争の惨禍が起ることのないやうにすることを決意し、ここに主権が国民に存することを宣言し、この憲法を確定する。そもそも国政は、国民の厳粛な信託によるものであつて、その権威は国民に由来し、その権力は国民の代表者がこれを行使し、その福利は国民がこれを享受する。これは人類普遍の原理であり、この憲法は、かかる原理に基くものである。われらは、これに反する一切の憲法、法令及び詔勅を排除する。

日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであつて、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に除去しようと努めてゐる国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ。われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する。

われらは、いづれの国家も、自国のことのみに専念して他国を無視してはならないのであつて、政治道徳の法則は、普遍的なものであり、この法則に従ふことは、自国の主権を維持し、他国と対等関係に立たうとする各国の責務であると信ずる。

日本国民は、国家の名誉にかけ、全力をあげてこの崇高な理想と目的を達成することを誓ふ。

要約

2016年7月11日未明、沖縄防衛局は、突如、米軍北部訓練場の一部返還に伴うヘリパッド建設工事再開に向けた準備作業を始めた。前日の参院選で辺野古移設反対の民意が示された直後の出来事だった。500名の機動隊が導入され、資材の搬入に自衛隊のヘリが使われるなどの強行策であった。現場では工事の強行に抗う住民らに対し、現場のリーダーである沖縄平和運動センター議長を逮捕拘留した。あるいは87才の車椅子の老女に「暴力をふるわれた」という「被害届」が出され事情聴取されるなど、弾圧が続いている。「土人」「シナ人」というヘイト言辭を浴びせる機動隊員もいる。

近年、基地問題がクローズアップされて、沖縄戦に至る琉球の歴史と、戦後アメリカと日本の間で翻弄される沖縄の苦悩が知られる一方、その内容を意図的に修正しようという動きも活発になってきた。「沖縄は基地をネタにした集(たか)り」「琉球処分は平和的解放」「人頭税はなかった」等々、枚挙にいとまがない。これらの言説の背景には、明治以降の植民地主義がある。「南京大虐殺はなかった」「従軍慰安婦は商行為」と、かつての行いの責任を霧消化するために繰り返される差別発言と同様である。先の機動隊員の言辭は、植民地主義の支配意識が、歴史を通じて日本社会の中で、人を媒介し伝わり続けていることを表すものだ。

沖縄では、古琉球(12世紀初頭から薩摩の侵攻に至るまで)の時代から今日の新基地建設に至るまで、受難の連続である。その受難とは、数百年にわたるヤマト・本土の天皇制をはじめとする支配権力による暴政、沖縄戦における甚大な被害と犠牲、戦後米軍による苛烈な占領統治である。とくに沖縄戦では、大日本帝国側から本土防衛のための絶対防衛圏(捨て石)とされ、米国側からは本土攻撃のキーストーン(要石)として重視されて、日本本土では見ない住民を巻き込んだ地上戦により、住民の4人に1人が命を失った。

沖縄は、大日本帝国の最初の植民地であり、戦後も自己決定権を奪われたまま現在に至っている。その沖縄から「沖縄だけに基地を押しつけるのは差別である」と訴える声を聞くと、私は、加害者であることを自覚する。加害者を辞めるためにできることは何か。

ここ数年のことだが、「引き取り論」という主張がある。「県外移設論」に呼応する形で出てきたこの論は、「日本国民の80%以上が安保体制を支持する以上、「本土」¹⁾が基地を引き取るべき」という論である。これを受けて、大阪・福岡では「引き取り運動」が始まり、沖縄でもこれを支持する声がかかる。たしかに基地を引き取ることによって沖縄に対して加害者であることを辞めることはできる。しかしそれは本当の解決なのか。運動の歴史と現状

から、奪われたもの、回復すべきもの、問うべきものを考える。

I 基地闘争の歴史

1. 沖縄の縮図・伊江島

私が沖縄に関心を持つようになったのは、1998年夏のことである。無論それまでに沖縄戦や米軍基地のことは知っていたし、95年には少女暴行事件があり、大きな問題になっていることも分かっていたが、恥ずかしながら傍観的・同情的な見方しかしていなかった。きっかけは覚えていないが、遅まきながら「当事者」として沖縄を見るようになったのである。

「まずは知らなければ」と下調べをした上で一週間沖縄に滞在して、米軍基地や沖縄戦戦跡を見て回り、ほぼ全島を一周した。その行程の中に伊江島があった。

伊江島は、沖縄海洋博覧会が開かれた本部半島から6キロメートル西の沖合にある、周囲22km、人口5,000人の島である。1943年8月、日本軍は県下各市町村からの徴用人夫を使って、東西2本の滑走路を作り始める。しかし、1945年3月上旬、逆利用される（滑走路を奪われ米軍の本土攻撃の拠点となる）ことを恐れた軍は、この滑走路を爆破する。これに動揺した島民の約3,000人が、対岸の本部・今帰仁の両村へ疎開した。3月16日から米軍上陸の4月16日まで、空襲と艦砲射撃が繰り返されて、島は廃墟となった。

日本軍は、民間人の15歳から18歳の少年たちを「義勇隊」、17歳から18歳までの未婚の女性を「女子挺身隊」、25歳以上の婦女で構成された「婦人協力隊」等を、戦闘員として編成した。戦場に乳飲み子を背負った婦人の切り込みがあったと、米軍は、驚きを持って記録している。米軍は21日に占領。伊江島住民の犠牲者は「集団死（集団自決）」等を合わせて1,500人。日米両軍を含む伊江島での死亡者数は4,900人。その中には、徴用されて伊江島に来た人夫も多く含まれた。島を占領した米軍は、生き残った村民を慶良間へ強制移送した。破壊された滑走路を瞬く間に修復し、いち早く本土攻略基地として使用した。

伊江島は、熾烈を極めた戦闘、また、その後の島の姿が、基地の島沖縄の縮図といわれている。

2. 土地問題の発端

1947年3月、米軍は婦村を許したが、すでに島の60%は軍用地になっていた。村民は、農耕を再開するに当たって、ほとんどの作物の種子や苗は本島から搬入しなければならなかったが、やっと落ち着きを見せようとする頃、

米軍による土地接収が強行される。

この時期アメリカは、1949年の中華人民共和国の成立、朝鮮戦争の開始と停戦を受けて、対中国包囲の一環として、日本本土や沖縄での永久基地の建設に取りかかっていた。それは、沖縄を不沈空母とするものだった。

1953年7月、島の建物・墓地の調査に来た軍の係官に協力した区長は、区民に日当を支払うという口実で書類に捺印させ（後日これが立ち退き同意書であることが判明）、土地の明け渡しを命じた。まず4戸を立ち退かせ（1954年6月）、爆撃演習を開始し、さらに真謝78戸、西崎74戸を含む150万坪を武力接収（1955年3月）して、基地の拡張をはかった。この真謝地区の地主の一人が、阿波根昌鴻であった。彼は、このときの様子を次のように書き記している。

「1953年7月19日のことであります。琉球米民政府土地係官の後藤という二世が真謝区へ来て、私は調査が仕事で朝鮮やあちらこちらで調査をしているが、こんども調査に来たといって、真謝区を見て帰りました。私はたまたまそのとき出かけていて伊江島にいませんでしたが、あとでそのことを聞いても別にとりたてて気にもしませんでした。

そのあと7月24日のことでありますが、同じ後藤二世が、土地の調査にきたといってまた伊江島にきました。そのときはまだ、真謝の農民はアメリカを信用しておりましたので、大城幸蔵区長をはじめ区民七名が協力して後藤二世を案内し、あとで日当を払うから英文の書類に捺印するよういわれたので、なに疑うことなくその書類に捺印しました。あとでその書類が立ち退きに同意する書類だとわかってびっくりしたのですが、そのときにはまだ少しも疑いませんでした。

それには、理由がありました。戦争中わしらは「鬼畜米英を打倒せよ」と教えられ、畳の上で死ぬのは犬死、戦場で死ねば靖国神社に祭られて神になる。捕虜にでもなったら目鼻をえぐられたあとで惨殺される。可愛い娘などは乱暴されるから棒やナタで親がひと思いに殺すことが極楽といわれ、実際に娘を殺した親もおりました。それが終戦とともにアメリカの宣撫班がやってきて、手足を斬らないのみか元日本大使のライシャワーさんのようにニコニコして罐詰めなどくれ、何をするかわからない米兵から、わしらを守ってくれました。」〔阿波根1973:20-21〕

戦時中の過酷な生活とたたき込まれた反米感情の反動は、アメリカ軍に対する無条件の信頼となった。それは本土でも同じことだったのだろう。本土は、今なおこの信頼の中にあるのかもしれない。しかし、沖縄ではこの信用

を利用しながら、土地の接収が進められていった。

3. 米軍と闘った農民 阿波根昌鴻

沖縄の平和運動を語る上で欠かせない2人の人物がいる。瀬長亀次郎(1907-2001)と阿波根昌鴻(1901-2002)である。瀬長は、米軍統治下の圧政の中何度も投獄されながらも、政治家として反基地闘争や本土復帰運動を先導した。一方、阿波根は、一農民として土地と平和を取り戻すために、一生を闘い抜いた平和運動家である。

阿波根は、本島で生まれている。父の影響から学問に憧れを持っていたという。伊江島に移り住み、本格的な農耕生活が始まるのは、1934年、31歳のときからである。その間、大学に行くための費用を稼ごうと、24歳で移民募集に応じ、キューバとペルーで8年間働くが、学問への夢も破れて帰国。京都で西田天香に会い、沖縄で農業を営むことを進められ、伊江島に渡る。土地を買う金を作るために小さな雑貨店を営み、島でも最低の土地を一坪一坪買い集め、最終的に4万坪の土地を集めた。何もない原野に木を植え、森林ができた。阿波根の思想の根幹は、この土地と生活だった。

米軍が伊江島の土地を接収するにあたって、下見に来た軍土地顧問は、阿波根に対して次のように述べたという。

「あなた畑すると難儀、金たくさん取って那覇に貸家をつくる、オイシイもの食べて、ラクして金持ちになる、こんな田舎ダメ、あなたの頭イモ頭」[阿波根,1973:23]

それに対し阿波根は、「土地は万年、金は一年」²⁾と拒否し、のちに「土地を守る会」の学習の中で次のように述べている。

「彼らがもっとも必要とし、かつ欲しがっているのは沖縄の土地である。それにもましてわれわれ沖縄人や農民には土地は生命であり、もっとも大事なものである。土地が変わる宝はないからである。土地は永遠に生命を生み続ける偉大で高貴な力を持っている。」[阿波根,1973:187]

阿波根が守ろうとした土地とは、金と代替可能な、あるいは金を生み出すための土地ではなく、生きる基盤としての土地である。またそこに、土地闘争を闘うための道理も見いだしている。土地が生命を育むものである以上、戦争とそのため基地は道理に反するのだ。

土地闘争を闘うにあたり、農民みずからがつくり守らなければならない「陳情規程」の中に、その道理を見ることができる。

陳情規程 一九五四年十月

- 一、米軍と話をするときにはなるべく大勢の中で何も手に持たないで座って話をすること耳より上に手を上げないこと
- 一、決して短気を起こしたり相手の悪口は言わないこと
- 一、うそ、いつわりのことを言わないこと
- 一、布令布告によらず道理と誠意を持って幼い子どもを教え導いていく態度で話すこと
- 一、沖繩人同志はいかなることがあっても決してケンカはしない
- 一、私たちは挑発にのらないため今後もつねにこの規程を守りましょう

陳情規程 一九五四年十一月二十三日

- 一、反米的にならないこと。
- 一、怒ったり悪口を言わないこと。
- 一、必要なこと以外はみだりに米軍にしゃべらないこと。正しい行動をとること。ウソ偽りは絶対語らないこと。
- 一、会談のときは必ず坐ること。
- 一、集合し米軍に対応するときは、モッコ、鎌、棒切れその他を手に持たないこと。
- 一、耳より上に手を上げないこと。(米軍はわれわれが手を上げると暴力をふるったとって写真を撮る。)
- 一、大きな声を出さず、静かに話す。
- 一、人道、道徳、宗教の精神と態度で接衝し、布令・布告など誤った法規にとらわれず、道理を通して訴えること。
- 一、軍を恐れてはならない。
- 一、人間性においては、生産者であるわれわれ農民の方が軍人に優っている自覚を堅持し、破壊者である軍人を教え導く心構えが大切であること。
- 一、このお願いを通すための規程を最後まで守ること。〔阿波根,1973:50-51〕

また米軍に対しては、次のように論している。

米軍に告ぐ

- 一、土地を返せ

ここは私たちの国
 私たちの村
 私たちの土地だ

一、侵略者伊藤博文

東条の悲劇に学べ
 汝らは愛する家族が
 米本国で待っている

一、聖なる農民の忠告を聞け

さらば米国は永遠に栄え
 汝らは幸福に生きのびん

○剣をとるものは剣にて亡ぶ(聖書)

○基地を持つ国は基地にて亡ぶ(歴史) [阿波根,1973:213-214]

また阿波根自身は、土地闘争の中で考えたこととして、次のようにも記している。

「この地球上に犯罪のない平和な国は一体どこにもないのだろうか。ここまで考えあぐんだとき、これは悪魔が天下を支配し、政治をしているからではないか、そして教育もお寺も教会もこの悪魔の召使いになって、悪魔から給料を貰い、悪魔に養われ、悪魔のために働く道具に使われているためではないだろうか。そうだとすれば犯罪を無くするには、悪魔の政治から人間が天下を支配し政治をする以外に道はない」[阿波根1973:219-220]

「悪魔とは他の人間の犠牲の上に生きる人間のことである。そして殺し合い、奪い合い、だまし合って生きる人間のことだ。悪魔には限りない悪欲がある。悪魔は持てば持つほど欲が深くなり、強くなればなるほど弱い者をいじめる。また悪魔ほど神や仏のこぼを覚えている者も少ない。悪魔はよく神の愛、仏の慈悲を説くが、それは相手をだます何ものでもない。

それから畜生がいる。畜生は物に左右され物を追い求めて生きる人間のことである。戦争中は日本軍といっしょになって金儲けをやり、戦後は勝ったアメリカ軍といっしょになって金儲けをする。畜生はつねに物のあるところや強い者についていく。悪魔ほど悪いことはしないが、畜

生には差じもないし、道理もわきまえない。』[阿波根1973:218-219]

阿波根は、米軍下にある琉球政府ではこの土地問題を解決できないと悟ったとき、立法院、アメリカ人のカトリック教会、沖縄人教会、お寺、学校その他に助けを求めて相談にいったが、どこにも満足のいく答えはなかったという。そのとき、道理をわきまえ勇氣あるのは、われわれ農民であると自覚するのだ。土地を守るのに自分たち以外に頼るものはない。こうして自立した土地闘争が始まり、窮状を訴える乞食行進によって、のちに島ぐるみ闘争へと発展する。

4. 権力と闘い続ける精神

よく阿波根は「非暴力の人」と紹介されることが多いが、本人はそれを喜ばなかったようである。彼は常々、「平和というものは闘いとるものであって、支配権力が譲ってくれるようなものではない」「平和を語るだけでは何にもなりません。平和は実践することです」[佐々木2003:9]と語ったという。

「非暴力」は運動の上で重要な要素である。とくに土地闘争においては、土地を守るのは生きるためである。それゆえ、闘争によって死者を出してはならないという前提があった。そのため「陳情規程」には、みずからを戒める内容が多いのだろう。また、死者を出すような抵抗のあり方は、双方に痛みをもたらす事態であり、その事態を徹底して回避することが「何を守るために闘っているのか」を明確に知らせるための手段であった。

阿波根は次のように言う。

「人のためにならないことはしない。人のことを思うから闘うのである。伊江島の闘いのことを書いてくれた人の中には、わたらの闘いを非暴力直接行動というようないい方をしてくれた人がおる。わたらはそういうものかとも思ったが、だが、わたらの闘いの基本は、何より相手のことを考える闘いということだったのであります。』[阿波根1992:186]

たんなる非暴力主義者という紹介の仕方は、戦後民主主義運動として行われてきたデモや座り込み、労働者のストライキ、最近では新安保法政反対デモなどを否定的に浮かび上がらせてしまう。とくに権力側が非暴力を宣伝するとき、反権力者を自分の側に引き込もうとする心理的な力を働かせていることを知らなければならない。

復帰後、軍用地主たちは、政府のさまざまな懐柔策によって運動から後退

していった。復帰時に約3,000人いた反戦地主は、1977年には400人。90年には100人足らずとなり、伊江島では10人余りとなった。

村人たちは、阿波根の口から語られる社会主義をやり玉に挙げ、アカと呼んだという。それでも阿波根は、彼らを誹謗中傷することはなかったという。それもまた、陳情規程に書かれた「沖縄人同志はいかなることがあっても決してケンカはしない」を実践したものだ。あえてみずから敵をつくらない、それは彼ら個々の事情を察してのことだろう。またその状況を作り出したものが何かを見据えてのことであったろう。またその眼差しは、基地の米兵やベトナムにも向けられていた。阿波根は、スクラップ業者に売るための砲弾の殻を分けてくれた米兵が、ベトナムへ行かされたことを書き記している。

「その班長は、やがてベトナムへ行かされました。そして一年ほどたってから、人間の形をしないほどやつれて帰ってきました。一週間の休暇なので米本国へ帰る暇はないといっていました。そして、ベトナムの戦場の話をいろいろと聞かせてくれました。

ベトナム兵を殺したくはないが、殺さないこちらが殺されてしまう。ベトコンは知恵があって、猛毒を塗ったトゲをわからないように置いてある。そこでこちらは靴に鉄板を張った。そうしたらベトコンはさわると爆発するような仕掛けを置いた。もうどうにもならない。

その米兵は再びベトナムへ行かされました」「その米兵は3人の子の父親でありました。そして、たぶんベトナムで死んだようでありました」[阿波根1973:194-195]

「真謝の農民とベトナムは、こころは一つでありました」「われらは戦後ずっとベトナムと同じ目に遭ってきました。幕舎生活はベトナム難民と同じで、われらにはベトナム人の気持ちが自分のことのようにわかります。引き続き逮捕・投獄・爆死、そしてますますひどくなってきた殺人演習はベトナムと同じです。そして真謝の農民はみな海外放送を聞いていて、ベトナムの戦況がどうなっているか、アメリカがどんなひどいことをやっているか、その裏でアメリカがだんだん負けてきたことも、よく知っています」[阿波根1973:195]

阿波根にとって、沖縄人であれ、ベトナム人であれ、米兵であれ、戦争で命を失うことは道理に反することだった。

阿波根の基地闘争は、彼自身が「命どう宝(命こそ宝)」というように、命

を守る闘いだった。またその命がいかなる属性であっても、権力が根こそぎ奪い取ろうとするすべての命に向けられていた。基地闘争は、反戦平和の運動であり、日米双方が幸福であるために、基地を引き揚げさせる運動だった。

Ⅱ 基地問題の行方

1. 基地引き取り論

「引き取り論」は、沖縄側から出された「県外移設論」に「本土」側が呼応したものである。私は、高橋哲哉氏の『沖縄の米軍基地「県外移設」を考える』を読むまで気がつかなかったが、この本が出版されるまでに20数年にわたって議論されてきたことがわかる。³⁾

これらの議論は、米軍基地が沖縄に偏って存在することが差別であることを論ずるものである。高橋氏はそれらを集約して、「県外移設論」の経緯、基地負担偏在の歴史、「県外移設」批判論への応答にいたるまで、事細かに解説している。そして次のようにいう。

「日本人よ！ 今こそ沖縄の基地を引き取れ」。自分たちが沖縄に基地を押しつけているなどと考えたこともなく、「沖縄大好き」で何度も観光に訪れたり、沖縄に憧れたりしている「日本人」が初めて聞いたら、さぞかしショックを受けるであろうこの声に、「県外移設」要求は凝縮されている。

私は、「今こそ」、「日本人」はこの声に応答しなければならないと考える。そして私の応答は、「イエス」というものである。「日本人」は、沖縄の米軍基地を「引き取る」べきである。政治的・軍事的・経済的などの力を行使して、沖縄を自己利益のために利用し、犠牲にしてきた歴史を断ち切るために。そして沖縄の人々と、差別する側・される側の関係ではなく、平等な人間同士として関係を結び直すために。[高橋2015:5]

かつて自己決定権を奪われた沖縄の民意が、みずからの選択として「県外移設」あるいは「琉球独立」を選ぶのであれば、それは「日本人」として受け止めなければならないと思う。しかしだからといって、高橋氏のように「引き取れ」「イエス」とはいえない。それは、「基地の負担を逃れるという利益を享受」したいわけでも、「沖縄を差別」したいわけでもなく、結果としてそうなっていることから言い逃れができないことも承知の上でのことである。

「県外移設論」に対する批判、それに対する応答は、沖縄の2紙⁴⁾の新聞紙上やウェブ上で今日まで永く議論されている。それは今も続いており、この拙文も、情報が更新されるたび書き直しを迫られるという状況にある。気が

重いのは、本土メディアがほとんどこの問題を取り上げないため、また、議論の参加者が高橋氏を除いて沖縄出身者であることから、ウチナー同士の応酬のように見えることである。右派勢力、あるいはそれを支える人たちから見れば、「基地撤去」であれ「県外移設」であれ、「反戦平和」を前面に出す以上、「反日」扱いになるだろう。運動の分断は、運動の弱体化にならないだろうか。

さらに、この議論の参加者の多くは知識人であり、今まで現場で闘ってきた人たちが沈黙していることも、気になるところだ。(私が知らないだけかもしれないが)現時点では、「オール沖縄」として「辺野古移設反対」で民意はまとまっているが、その先の意志決定には、まだ時間が必要なのかもしれない。

「結果としてそうなっていることから言い逃れができないこと」は、「ヤマト」の人間として深く受け止めなければならない。それは、みずからがこの問題の当事者であるという責任主体の確認のためである。高橋氏の「引き取り論」も、その主眼はこのあたりにあるのだと思う。しかし、「結果としてそうなっていることから言い逃れができないこと」に反応する人は、きわめて良心的な人だと思う。「強姦殺人事件があっても、沖縄に基地は必要だ」と主張する人には通じはしない。なぜなら、彼らは一人の命を守ることよりも全体を守ることが責任だと思っている。大を守るために小が犠牲になるのはしかたがないと思っている。しかも、その小があらかじめ設定された場所や人であることを差別だと思わない人たちである。また、守るべき大の中の人を守れなかったとき、「犠牲者」として外に掃き出すことができる人たちでもある。全体主義の本質は利己主義であるが、ここはそれを論ずる場ではない。しかも、高橋氏は今まで、歴史修正、国家と教育、靖国神社、原発などをテーマに発信してきた先輩であり、私が言うべきことでもない。

しかしそれでも、基地の賛否、安全保障の賛否にかかわらず「基地の負担を逃れるという利益を享受している。それは沖縄を差別している。いかなる理由があろうとも結果としてそうなっている。言い逃れはできない」に集約され、「基地引き取り論」の根拠とされることに、違和感を感じる。

2. 負担平等論

私は、当初「沖縄の基地負担を分かち合おう」という声に、3.11以降の日本はすこし希望の持てる方向に変わったのかと期待もしたが、すぐにそれは不安に変わった。それは、NHKフェイス「“基地のまち”は問いかける」⁵⁾を見たからだった。ここでいう“基地のまち”とは岩国のことである。沖縄の基地負担を全国で分かち合おうと声を上げる地方議員が、全国各地から岩

国へ視察にやってくるのだという。こうした動きの背景には、地方行政の経済的な行き詰まりがある。表面上は普天間基地運用停止後、沖縄の基地負担を分かち合おうというものだが、実質基地を受け入れることによる見返り、交付金を当てにしてのことである。結局原発のように弱いところに押しつけられ、依存体質から抜け出せない地方行政が出来上がることになる。それは、新たな暴力装置の再生産を予感させる。負担平等論は、本当に平等なのだろうか。

知念ウシ氏は、1966年沖縄県那覇市で生まれた。大学入学を機に「本土」で暮らす、2000年沖縄に戻り、以後反基地運動を続けている。彼女は、女性のみで市民団体に所属し、ライターとして新聞や雑誌での執筆を仕事としている。

私が知念氏の県外移設論を確認したのは、2007年出版の「あなたは戦争で死ねますか」の中の「日本の友人たちよ。基地持って帰ってから、またんメンソーレー」である。知念氏は、基地がなくならない理由を、次のように分析している。

どうして沖縄から基地がなくせないのだろうか。それは、日本とアメリカが日本国内に米軍基地を置くという安保条約を結んでいるからだ。ではどうして、私たちはその条約を変えられないのだろうか。それは、圧倒的多数の国民がこのことに賛成している。または反対していないからだ。なるほどそれなら、なぜこんなにも米軍基地は沖縄に集中しているのだろうか。
—中略—

それは日本の政府がアメリカの政府と共同してそのような政策をとっているからだ。なぜそういう政策をとるのだろうか。それは、—中略— そういう政策をとっても問題視されず、政権支持率が下がって選挙で負ける、などということが予想されないから、安心していられるせいなのだ。つまり、多くの国民が支持している。反対していない。—中略— そして沖縄以外の人、賛成する人も反対する人も無関心な人も、圧倒的大多数が基地の負担を逃れるという利益を享受している。—中略—

そうであるなら、沖縄にだけ、こんな過大に負担させないで、他のところも平等に負担するべきではないだろうか。みんなで決めた政策はみんな平等に負担するのが当然だ。賛成の人はもちろん、反対の人でも、自分の意見が多数をとれなかったのだから、その結果を平等に負担して、その上でまた、他の人を「やっぱりこの政策はよくないよね」と説得して、

覆すしかない。これが民主主義のルールなのではないだろうか。〔知念2007:65-68〕

知念氏が言う平等に負担すべき負担とは何か。それは、たんなる基地の広さや米軍の数ではなく、「痛み」である。知念氏は、同書の中でこうも書いている。

あるとき、メンバーでおしゃべりしていたら、こんなふうな展開になった。
「基地の平等負担といたら、基地を各県で平等に配分するんじゃなくて、私たちが感じてきた圧迫感そのままに、0.6%の面積に75%の負担という比率で、一県ずつ、持ち回りでやるべきだよ。」

「そうそう、ちゃんと60年ずつね」

「そうでなければ、本土の人たちが、私たちと平等になるなんて、ありえない。本土の人は想像しようとしないうし、想像力自体なさそうなんだから」

なるほど。そこで私も考えた。

「だったら、基地だけじゃなくて『琉球処分』、いや『日本処分』からやる必要があるね。基地問題って、ただ戦後の基地の問題というのではないから。本土の人たちもまず、自分の国が滅ぼされる。征服者が『本土』となって、その言語、文化、歴史、世界観が正しい優れたものと教えられ、同化を強要される。日本語を話したら、『方言札』を首から吊される。服装も文化も進歩的な文明である『本土』の真似をしないといけない。政治も経済も社会も文化も教育もすべて外来者である『本土』の人が牛耳る」

「第二次世界大戦では住民が巻き込まれる国内唯一の地上戦である『日本戦』で住民人口の4分の1が命を奪われる。敵から殺害されるのはもちろん、守ってくれると信じていた友軍からも、日本語を使ったらスパイ容疑で殺される。『集団自決』を強要される。泣いている赤ん坊も殺される。避難した壕から追い出される。食料を奪われる。さらに、その戦争に友軍が負けたら敵に占領される。『日本戦』によって時間稼ぎをして決戦を避けた『本土』同胞は、日本占領と軍事基地化を条件に、敵だった占領者と講和条約を結んで自分たちだけ独立する。日本人は、銃剣とブルドーザーで土地を奪われ、占領者の基地がたくさん建設される。軍事優先政策で人権侵害がひどい。」

「戦争放棄と人権保障のあるすばらしい『本土』の憲法に憧れ、日本人

は『本土』復帰運動を起こす。しかし、『本土』と占領者は共犯していて、日本の所属先だけは『本土』に変わったものの、状況は本質的にあまり変わらない」[知念2007:92-93]

この後も、現在に至るまでの沖縄の人々が受けてきた数々の苦痛が、列挙されている。知念氏が実際こうなることを望んでいるかどうかは別にして、この「痛み」を理解してほしい、というよりも「ヤマト」に移したいと願っているのだろう。

いままで幾度となく沖縄は、意思表示をしてきた。政府による振興策という懐柔策に分断されながらも、基地を拒否してきた。それを受け止めることができなかつたのは、「ヤマト」の人間である。日米安保体制を望んでいるのは、沖縄ではない。基地を沖縄という事実上植民地に押しつけながら何も問題がないかのように沈黙し、事件や事故が起こり明るみになると地政学を持ち出して沖縄の声を封殺してきたのは、日本政府と「ヤマト」の人間ではないか。だから、この「痛み」は沖縄ではなく、「ヤマト」こそ受けるべき「痛み」のはずだ。だから基地といっしょに「痛み」を持って帰れという強烈な批判と要求になる。しかしそれに「イエス」と答えることは、同時に「痛み」の「共有」や「共感」ではなく、「痛み」の移設であり、再生産でもある。その責任はだれが負うのか。沖縄なら良いというのではない。強姦殺人事件の被害者を生き返らせることができないように、その被害者が「ウチナーンチュ」であれ「ヤマトンチュ」であれ、あるいはそれ以外の人であれ、責任のとりようがないのだ。

3. 根本的な解決を目指す方途

2013年4月19日付の朝日新聞朝刊に、「(座談会) 15歳と語る沖縄 知念ウシさん×高橋哲哉さん×奈良・山添中の生徒たち」⁶⁾という記事が、掲載された。

修学旅行で沖縄戦や米軍基地問題を学んだ奈良県の山添村立山添中学校の3年生20人と、高橋氏・知念氏両名が語り合うという内容である。中学生の質問に対して両名が答える形で進行するが、その終盤に中学生側からきわめて重要な質問が、投げかけられている。

質問 高橋さんに質問です。対談記事の最後に知念さんから「(本土に) 基地を持って帰ってくださいね」と言われて「それが日本人としての責任」と語っています。これが引っかかっています。何に対し

ての責任ですか。

高橋 沖縄に米軍基地があれだけ集中して、しかも何十年と続いているのは、基本的に日本人がやってきた結果です。沖縄で戦争したことも、米国が施政権を持ったことも。1972年に日本に主権が戻った後も沖縄の基地負担率は上がりました。つまり日本人が選択して、沖縄の人たちに押しつけてきたと僕は考えています。だから日本人として、責任をとらなければいけない。そういう意味です。

質問 問題は沖縄の米軍基地じゃないですか。移設しても、移した先の人たちはまた同じ問題を抱えるから、根本的な解決にならないと思う。基地をなくすにはどうしたらいいのか、どうすれば問題を解決できますか。

知念 解決したい、そのためにどうしたらいいのか知りたい、という気持ちはすごくうれしい。何か特別なことではなく、日常生活の中で、おかしいと思ったことは家族や友だちや周りに話す。それを、みなさんが今いるところで続けていってほしい。考えながら動き、動きながら考える、そういう大人になってほしい。

現在沖縄に押しつけられている米軍基地の責任が、「ヤマト」にあることは疑う余地もないが、引き取った後はどうなるのか。「根本的な解決にならないと思う」という疑問に対しての答えは、出されていない。ただし両氏の著作の中には、それに当たると思われる部分がある。まず知念氏。

基地を本土に移転するという主張は、基地があることによる米兵からの女性への性暴力の移転も望むということなのか、と思う人もいるだろう。本土の女性や子どもが米兵から性暴力を受けたら、私、あるいは沖縄の女性はその責任をとれるのか、と。

ではその前に、なぜ本土の女性は同じように問われないのだろうか。「沖縄の女性や子どもを犠牲にして米兵から性暴力を(かなり高い割合で)受けなくて済んだ責任を、あなたはどうか」と。

私は本土の女性たちに言わなくてはならないだろう。日本に米軍基地を置くという政策による苦しみは、その政策に賛成し、あるいは覆せない本

土の「本人」たちが負ってくれ、と。もうこれ以上私たちを犠牲にするのではなく、自分で自分自身と子どもたちを守ってほしい、と。基地がいやなら、自分で立ち上がってなくしてくれ、と。[知念2007:81]

なぜこれを中学生の前で言わないのだろう。ただ、「どうすれば問題を解決できるか」の答えにはなっていないが。次に高橋氏。

県外移設はこの犠牲を沖縄から「本土」に移すだけで、「犠牲のシステム」の解消にはならないではないか、という意見も聞こえる。これについては、どう考えれば良いだろう。

まず第一に、沖縄の米軍基地と「本土」の米軍基地を同じ「犠牲」という言葉で語ってよいのかどうか。

くどいようだが、沖縄にとっては、安保も米軍基地も、圧倒的な力によって押しつけられたものである。「天皇メッセージ」の言葉を想起すれば、「米国の利益」と「日本の防衛」のために「軍事占領」状態が継続されてきたのであり、「本土」の国民は、そこから利益を得る一方、沖縄は犠牲を払わされてきたのである。しかし「本土」にとっては、安保も米軍基地も押しつけられたものではない。日米安保条約を維持して在日米軍に安全保障を託すべく、多数の国民が政治的選択をして今日に至っているのである。「本土」の国民にとって米軍基地負担は、みずからの政治的選択の結果として、本来引き受けるべき責任と言うべきものではなかろうか。もしも県外移設によって米軍が沖縄から「本土」に移転し、それによって耐えがたい犠牲を生じるといふのであれば、それは「本土」がみずからの責任で除去すべきものではないのか。

第二に、沖縄の犠牲を「本土」に移転してよいのかと言うとき、具体的に、県外移設によって「本土」にどれだけの負担が生じると考えられているのか。[高橋2015:119-121]

このあと、横田基地を例に、基地の存在を肯定する意見が8割を超えていることをもって、沖縄の犠牲と本土のそれとは重さが違うことを論じ、かりに46都道府県に平等に分けたとすれば、その負担は沖縄より遙かに軽いことをもって、犠牲の移転ではないと論じている。

犠牲は個人の「痛み」として現われる以上、負担の量とは関係がない。「本土がみずからの責任で除去すべき」は分かるが、個々の「痛み」は、だれがどのようにして責任を負うのだろう。

「基地をなくすにはどうしたらいいのか、どうすれば問題を解決できますか」の答えは何だろうか。私なら「みんなが協力して反対し、基地をなくすことです」と答えるだろう。

しかし、基地を引き取る場合、この答えは言えなくなる。差別からの解放と平和構築の論理は、同一線上で一体化したものだ。「負担平等論」を現実のものとしようとするならば、基地を引き取るためにこの2つをむりやり引きはがし、平和論を一旦外へ放り出さなければならない。「ウチナー」「ヤマト」にかかわらず、「引き取り論」に根強い反対意見が多いのは、こうした背景があるかもしれない。

この章の最初で述べたように、「県外移設」が沖縄の自己決定による民意である以上、それは沖縄の「痛み」として受け止めなければならない。しかし基地の引き取りは「ノー」と言わざるをえない。無論「ノー」は沖縄に向かってではなく、国家に対してである。強制的であろうがなかろうが、命を摘み取る戦争の装置として基地を設置するのは、国家とそれに群がる搾取者である以上、国家に「イエス」とは言えないのだ。かりに私以外すべての「ヤマト」が「イエス」を主張しても、一人「ノー」と言い続けるだろう。

最後に『思想運動』986号に掲載された藤原晃氏の論考を参考にされたい。

発言台 運動に関するひとつの考察

「支援」と「共闘」とを隔てるもの⁷⁾

参院選直後の7月22日。安倍政権は機動隊を500名規模で導入し沖縄・高江で、ヘリパッド拡充阻止のために抗議する住民を排除した。その弾圧の映像には、機動隊のカマボコ車両、新帝国警備のヘルメット、その背後に暴力的に並ぶ工事フェンス、殴る蹴るの暴行を加えながら座り込みで立ち向かう人たちを引きずる野蛮な光景が映し出された。そして、ことの大小はあるとはいえ20年前に私が経験した光景と重なり、怒りを中心とするさまざま感情が甦ってきたのである。

「寮シンパ教授」の限界

かつて、東京大学の学生寮の廃止反対を当事者として闘ったことがあった。平等と自由に価値を置く民主主義者を曖昧に自負していた当時の私は、正義感に従って入寮し住み抜き闘争に加わった。ちょうど大学側が入寮募集の停止を宣言した年でもあった。

早朝突然、何百人というガードマンに取り囲まれ、工事車両が建物の一部

を破壊し始めたので、考える間もなく、座り込みや車両の搬入阻止の実力阻止行動に取り組んだ。そんな「知性の府」の欺瞞を何度か体感したことによって、自己実現的な欲求をいくらかあきらめ、自分の曖昧な思想に変更をせまられた。

学生が自主的に運営する「寮寮」の廃止は教授会により決定され、直接には「大学当局」の攻撃だったが、その実態は国策的攻撃であり、当然われわれは一つの学生寮廃止反対に留まらず「大学自治」「学生自治」を懸けた闘いであると訴えていた。その過程で大学教授の中にも見るに見かねてということか、ことの終息を画策し動いてくれた幾人かの教授が現われた。彼らは良心的に行動し、われわれ寮生たちは「寮シンパ教授」などと呼んでいた。しかし、国立大学の独立行政法人化、大学の「競争的環境化」政策の下準備としての教授会の形骸化がほぼ完成に近づき、「大学の自治」、「学問の自由」という理念すら空しく響き始めていたときでもあった。だからこそ（もっとも良質であるからこそ）「寮シンパ教授」たちには、先ずは自分たちの組織である教授会が真の敵との闘いに立ち上がるよう、インテリ的良心の枠組から一歩踏み出し、われわれと共に座り込み、学生と教授（一部だとしても）の共闘をつくることを望んだが、結局それには至らなかった。私は、十分に行動しなかったという自戒と同時に、そのとき「支援」を「共闘」へと転化することの必要を見たのだった。

問題は「闘争の欠如」

先日、『AERA』6月27日号に目取真俊（作家）と高橋哲哉（哲学者）の対談が掲載されていた。

本土の無関心に矛盾を突きつけるために「県外移設」論の必要を唱える高橋氏に対して、目取真氏は七一年間も無関心でいられるように基地を沖縄に集中して来たのだから、「県外移設」論で矛盾を指摘されたぐらいで多数の人が変化することはありえない。今、もっとも必要なのは一四〇万の沖縄県民が目覚めて行動に立ち上がることだと説き、その観念的な視点から抜け出すためにも現場の座り込みでもなんでも参加することを高橋氏に要請していた。

目取真氏の主張は、そのまま本土に住む活動家に向けた支援の要請ではなく、私には共闘の呼びかけに聞こえた。

闘争的な社会運動には、当事者への支援が必要である。そのとき、支援者

の生き方はどのようなものでなければならないだろうか。

もっとも有効な支援を追求しようとするれば、それは、自分の生活や労働現場を省みさせて、異なる場面ではあるが共通の課題、共通の敵を見出し、みずからが当事者となる闘争へと向かわせる。「支援」は、「共闘」にならざるをえない。その過程には、自分が属する階級を意識する可能性がある。

しかし、もっぱら「支援」の内に留まろうとすると、すなわち、みずからが当事者となるべき闘争を忌避するとき、「支援者」は「調停者」とならざるをえない。「調停者」は、ゲームの審判になったつもりで、一段上の「中立」な位置から状況を見下し、そこに自己実現的欲求が重なると、調停者は、抑圧者へは免罪を、犠牲者へは妥協と屈服を当然に要求し始める。つねに権力を掌握しているのは抑圧者であり、「中立」などは存在しないという当たり前の現実が無視されるからである。

悲惨や野蛮への大多数の無関心を捉え、「想像力の欠如」を謂う良心的知識人をよく見るが、それは現象であって、本当は「闘争の欠如」なのではないだろうか。だれでもそうであるように、闘争の場面に置かれることなしには、その必要を感じることはできないし、日常生活を批判的に省みて真実を学習しようする動機は、起こらない。かりに想像力を働かせ、同情し、時間と労力を割いて支援に駆け付けたとしても、その次には支援の枠に留まるのか、そこから一步踏み出すのかの自問自答を迫られる。そして今日の社会状況は、いよいよだれしも自分自身の生活や職場でも共通の敵による野蛮がまかり通っているのではないだろうか。「闘争」は必要とされているのである。

「支援」と「共闘」の勘違いは、そこそこに見ることができる。朴裕河の『帝国の慰安婦』という装いも、これを支持する日本の「知識人」諸氏も、この勘違いを犯しているように私には見える。彼らは「支援」を口にしながら、日本政府に本当の謝罪を要求しつ続ける不屈の元「慰安婦」たちに向かって、左右の手に「謝罪」と「金」を持ち脅している。

戦争法反対運動で立ち上がった「学者の会」や「シールズ」が国会内への「支援」から一步踏み出すためには、残酷なほどに高騰する学費、「持たざる者は働け、持つものは支払え」という足元の野蛮との闘争が不可欠ではなからうか。

日本労働運動への攻撃の一環としての国労弾圧の過程においても、多くの労組は「支援」を口にしたが(口にするだけまだいい)、みずからの闘争課題として組織を懸けて闘うことができなかった。職場で労働者の身の上にかかる「不幸」への労働組合執行部の対応が高々「支援者」に留まることにも、

共通の勘違いが表われている。その常日頃の繰り返し、「支援」する側にせよされる側にせよ、組合員の一人ひとりの意識を支援者の枠内に限定する。

この勘違いが国際連帯の課題に向けられると、朝鮮半島情勢や社会主義への態度に、それが表われてくるのではないだろうか。「かつてわたしもマルクスを読んだけど……」と、ソ連邦の崩壊にはみずからの責任を痛痒すら感じられず、支配階級といっしょになって、運動内部から「社会主義」思想への追い打ちをかけるような宣伝をしている輩があまりに多い。それが、朝鮮民主主義人民共和国への米日韓による執拗な攻撃を見ようとすらしめない態度の要因であり、「われわれは攻撃されている！」とのデマ宣伝を鵜呑みにする脆弱さを、真の敵の前に曝している。われわれの思想的闘争課題は、こんなところにもあるのではなからうか。(藤原晃・神奈川の教育労働者『思想運動』986号 2016年9月1日号)

[注]

- 1) しばしば多用される「本土」という用語は、中心一周縁といった主従関係を想起させる場合もあるが、適当な表現が見当たらないため、括弧書きで「本土」とした。
- 2) 土地闘争で使われた旗の中に、この書き込みがある。1953年の石川県金沢近郊の内灘闘争が発祥であると言われている。
- 3) 野村浩也2005、『無意識の植民地主義』御茶の水書房、知念ウシ2007、『あなたは戦争で死ぬますか』日本放送出版協会、池田緑2014、『沖縄と日本における社会意識のポリティクス：“平和”言説を中心に』大妻女子大学紀要、桃原一彦2014、『沖縄、脱植民地への胎動』未来社など
- 4) 琉球新報社、沖縄タイムス社
- 5) フェイス『“基地のまち”は問いかける』2016年2月19日に放映 NHK
- 6) 朝日新聞2013年4月19日の朝刊19面『(座談会) 15歳と語る沖縄 知念ウシさん×高橋哲哉さん×奈良・山添中の生徒たち』
- 7) ホームページ<http://www.shiso-undo.jp/shucho/986fujiiwara.html> (2016年11月24日)

[参考文献]

阿波根昌鴻1973、『米軍と農民』岩波新書。

阿波根昌鴻1992、『命こそ宝』岩波新書。

佐々木辰夫2003、『阿波根昌鴻 その闘いと思想』スペース伽耶。

斉藤貴男・知念ウシ・沼田鈴子・広岩近広2007、『あなたは戦争で死ぬますか』。

高橋哲哉2015、『沖縄の米軍基地』集英社新書。